

庶民の不満を反映した伝承

民話とは共同体に伝承する庶民の昔話、あるいは物語というべきだろうか。民俗学者の宮本常一の一連の仕事は、共同体に生きた人々のその歩みを丹念に聞きとっているが、実はこの種の聞きとりは戦時に流布する民話に関しても必要ではないだろうか。

私自身、戦争体験者の話のうちで、あえてこれは庶民の伝承に連なるというものは、「戦時民話」という分類に組み入れることにしている。たとえば1942（昭和17）年8月18日に、ガダルカナルを制圧したアメリカ軍に対して、大本営はグアムを出て日本に戻る途中の第28連隊（北海道旭川市）の一木支隊（一木清直支隊長）2000人のうち先遣隊約1000人を向かわせて、占領された航空基地奪回を試みる。しかし圧倒的な物量を誇るアメリカ軍により、一晩でほぼ全員が玉砕となる。その夜、旭川の連隊前で歩哨に立つ兵士は、遠方から帰還して兵舎に入っていく部隊を「捧（ささ）げ銃（つつ）」で迎えている。むろん兵士たちは帰ってこない。市民の間には、軍靴の音を聞いた、あるいは兵士の姿を見たという話が、戦後も語り継がれてきた。

実はこういう話は全国どこにでもみられる。まさに「戦時民話」なのである。戦友会が戦後、43（昭和18）年5月に玉砕したアッツ島に、アメリカの許可を得て遺骨収集に出かけた。至るところから人声ならぬ「ワァー」という音が聞こえた。写真を撮るとそこには必ず戦友の顔が写る。私にもその写真を見せてくれたが、それは雲が写っているようでしかない。しかし人の顔といえはいえなくもない。

これまで私は兵士、将校など軍籍をもっていた1000人余の人々に話を聞いてきた。ごくふつうの商店主が、私と話しているうちに「戦友の寺田が現れた」と言って、私の目を見ず、私の背後にいるという寺田に、「皆、元気だよ」と話しかけたりする。その商店主らが斥候（偵察）に出たときに寺田だけが「敵兵」に射殺されたという。寺田はときどき誰かに連れられてやってくると言いだし、私は震えあがった。こういう戦時民話を、私なりに見ていくと、次の四つのタイプがある。

- (1) 戦場で死んだ仲間がいつも現れる。
- (2) 兵士が死ぬときに故郷の実家や肉親のもとに帰る。
- (3) 恨みや悔しさを残した兵士がその対象となる人（あるいは組織）の前に現れる。
- (4) 火の玉、霊魂などになって兵士の命を救う。

むろんこれは私が聞いた戦時民話（幽霊話になるケースも多いのだが）を便宜的に分けてみたにすぎない。とはいえ、2015年に日本民話の会で講演したときに、「戦争の民話」という視点でさまざまな史料、あるいは証言を集めて研究している人たちの存在も知った。そのような人たちの集めた話（「戦後70年、戦争の時代を語りつぐ」＝「聴く語る創る第24号」所収）に目を通し、私の四つの分類も決しておかしくはないと確かめた。

この誌の中の話をも二、三語ると、庶民の間には山本五十六連合艦隊司令長官が戦死したときに全国に火の玉が飛んだと話されたという。この証言者（東京都の女性）によると、「戦争中よ。山本元帥、あれ亡くなった時、日本中ものすごい魂が飛んだんだわな。なーんたってもものすごいんだよ。日本中飛んだってさー。（略）その頃に人魂（ひとだま）が日本中飛んであるいたんだってよ。（略）（20センチ以上ある？）まずすごい玉。大型（以下略）」といった具合だ。山本が戦死したのは43（昭和18）年4月18日だが、公表されたのは1カ月ほど先のこと。しかも国葬であった。この証言のように火の玉を見た、あれは山本元帥だと全国に広まっていたようだ。

サイパン、グアムなどのホテルで就寝中に室内を歩き回る日本兵の姿を見たとの証言も多い。沖縄戦でのガマで修学旅行生たちが明かりを消して死者を追悼していると必ず誰かに腕をつかまれるという話も聞いたことがある。前述の「聴く語る創る」誌が紹介しているが、沖縄からの報告に次のような話があるようだ。

52、53（昭和27、28）年ごろに奄美や沖縄の島にそれまでこの地で見かけなかった花が咲き乱れて地元の人たちを驚かす。

特攻隊の機が突っ込んだ地で、彼らは飛び立つときに女子学生たちから多くの花をもらった。それらの花の種が咲いたのでは、と推測されている。美しくも悲しい話である。

戦時民話を民俗学の手法でまとめることで、庶民の心根にある〈戦争への不満〉を整理していく必要があるとの思いが一段と強くなる。